

シュメールにおける地域国家の成立

前 田 徹

はじめに

筆者は、研究の一つとして、メソポタミア前3千年紀を、王権・王権観の発展から都市国家分立期・領域国家期・統一国家期に3区分して、それぞれの時代の特徴を捉えようと試みている。時代区分とは、幾何の問題を解くときに引く補助線に喩えることができる。提示された図形に補助線を一本引くだけで、見えなかった図形の特徴が見えてくる。歴史における時代区分というのも、この補助線と同じで時代の特徴を明らかにする区分線である。前3千年紀は下に示したように、時代を経る程に王の支配すべき世界は拡大する（前田2003）。最初に、王権の展開を3区分にしたがって述べ、本稿の課題に繋げたい。

都市国家分立期（「都市」の王）： 都市支配

領域国家期（「国土の王」「全土の王」）： 中心地域の支配

統一国家期（「四方世界の王」）： 中心地域と周辺地域すべての支配

都市国家分立期には、都市国家が並存し、未だ都市を越えた領域の支配を明示する王号は成立していない。つぎの領域国家期になると、全都市の上位にあって支配し得るのは唯一、王だけであるという王権観が成立し、唯一の王（ルガル *lugal*）に対して、服属する都市支配者は画一的にエンシ（*ensi*）と呼ばれ、両者の間に格差が設けられた。この時期の王は「国土の王」もしくは「全土の王」を名乗り、中心文明地域であるユーフラテス川流域を支配すべき領域と宣言する。領域国家期に続く統一国家期の王は、「四方世界の王」を名乗り、中心地域だけでなく、その外側に広がる周辺地域をも包含してすべてを支配する王を宣言した。

王が支配すべき世界が拡大するのであるが、使用した王号から一つの限界性が看取される。「国土の王」、「全土の王」、「四方世界の王」中の「王」とは、シュメール語で *lugal*、アッカド語で *šarru* であり、変化がない。王号の差は、後置した「都市」、「国土」、「全土」、「四方世界」が示す領域の広さだけで区別される。空間的な領域への関心で王号を捉えたのであり、中国において、「王」とは異質の隔絶した最高権を表象するために「皇帝」号を創出したような変化が、メソポタミアでは起こらなかった。王権の質的展開を明示する王号を生み出さなかったことに、メソポタミアにおける王権の限界がある。

つぎに、各期の長さに注目すると、都市国家分立期の圧倒的な長さが指摘できる。都市国家が成立した前3200年から数えれば約900年続いたことになり、エジプトが最初期から上・下エジプトを支配する統一王朝として出発したことと対称的である。都市国家分立期が長く続いたことで、都市国家的伝統が育まれ、領域国家期や統一国家期にも消滅することなく維持された。メソポタミアの国家や王権の特色を挙げるならば、分権的な都市国家的伝統が中央集権体制への移行を阻害し、前3千年紀メソポタミアでは、ウル第三王朝を含め中央集権体制の国家は存在しなかった。王権理念と現実とが乖離していたのである。

さて、都市国家分立期の900年間、王権や国家のあり方が不変であったとは考え難く、都市国家分立期に下位の区分を設ける必要性が認められる。しかし、都市国家分立期（＝初期王朝時代）の研究には史料不足がつかまとう。同時代史料としての王碑文は、前2500年頃とされるキシュの王メシリムからであり（年表1）、それ以前では、王碑文があったとしても年代を確定することが出来ず活用できない。行政経済文書も、前2500年以前では、なお解読を必要とする古拙文書だけであり、史料としては不十分な状態にある。

史料に恵まれない前2500年以前の初期王朝時代を、どのように叙述できるのか、代表的なジェイコブセンとハッローの研究を検討する。これについては、すでに論文を発表したことがある（前田1981）。本稿では、行論の必要から再論するものであり、既発表論文から直接引用する部分

年表 1

初期王朝時代第1期		2900-2700					
初期王朝時代第2期		2700-2600					
初期王朝時代第3期 a		2600-2500					
		アッカド	キシュ	ウルク	ウル	ラガシュ	ウンマ
都市国家分立期 2300	2500 2410		メシリム		メスカラムドゥ アカラムドゥ メスアンネバダ アアンネバダ	ルガルシャエンゲル	
	初期王朝時代 2260			ルガルキギネドゥドゥ ルガルキササルシ		ウルナンシュ アクルガル エンアンナトゥム エンアンナトゥム 1 世 エンメテナ エンアンナトゥム 2 世	パビルガルトゥク エンアカルレ ウルルンマ イル ギシュジャキドゥ
	領域国家期 2230	(サルゴン)	エンバイシュタル	エンシャクシュアンナ ルガルザゲン		エンエンタルジ ルガルアンダ ウルカギナ	ルガルザゲン
統一国家形成期 2100	アッカド王朝時代 2130	サルゴン リムシュ マニシュトゥシュ ナラムシン		ウルギギル			
	混乱期 ドゥドゥ シュトゥウル						
	2100			ウトゥヘガル		グデア	ナムマフニ
統一立国期 2000	ウル朝 第三代 2000				ウルナンム シュルギ アマルシン シュシン イッビシン		

があることを予めことわっておきたい。その後に、都市国家分立期の最終段階である前2500年以降に、地域国家が形成されたことを指摘したい。地域国家とは周辺の都市国家を服属させ、地域統合を果たした有力な都市国家のことである。地域国家の出現を都市国家分立期最後の段階における特色として示すことが本稿の目的になる。

I. 初期王朝時代の区分－ジェイコブセンとハッローの理解

ジェイコブセンとハッローは、初期王朝時代を鳥瞰し、それぞれの視点から時代区分を行っている（Jacobsen 1957; Hallo 1971）。彼らが設定する区分の概略を示す（前田1981）。

ジェイコブセンは、「原始民主政」論の立場から時代を区分し、原始民主政期・原始王政期・領域王国期に3分した。原始民主政とは、共同体的社会において、成人男子の集会が権威をもつ制度であり、成人男子の集会は、危機に際して臨時に政治指導者や軍事指導者を任命した。全シュメール都市の「ケンギル同盟」はこの時期の末に出現する。つぎの原始王政期とは、各都市間の抗争を契機に軍事指導者の権威が増し、そこから転化した王権が、成人男子の集会を凌駕して進展する時期である。ジェイコブセンによれば、ギルガメシュ叙事詩に現われるキシュの王アッガとその父エンメバラゲシの治世（初期王朝時代第2期）に宗主権はキシュにあり、宗主権者キシュが、ケンギル同盟の平等原理に基づく「原始民主政」を破壊し、「原始王政」原理を導入した。そのことで、王号「キシュの王」はシュメール全土の支配を意味することになったとする。最後の領域王国期とは、王朝理念が成立した王権の確立時期であり、アッカド王朝による統一へとつながる。

ハッローは、ジェイコブセンと同様に初期王朝時代を3区分するが（表1）、各々を黄金時代、英雄時代、王朝時代と命名する。黄金時代とはキシュの宗主権のもとで一応の統一を享受する時代である。ジェイコブセン、ハッローともに、「キシュの王」をシュメール全土に対する宗主権と解するが、ジェイコブセンが原始王政期に置くのに対して、ハッローは、『シュメールの王名表』に最初に王権が天から下されたと記されるキシュ第一王朝時代のもの、即ち、黄金時代の諸都市の調和を維持する権威であったとして、初期王朝時代第2期以降の王号「キシュの王」は実体を失った前代の遺制とみなした。英雄時代とはギルガメシュたち英雄の活躍時期で、前代の統一が崩れる時代とする。英雄叙事詩の使用はジェイコブセンと同じである。しかし、「ケンギル同盟」を、ジェイコブセンが原始民主政期の同盟関係と理解したのに対して、ハッローは英雄時代に配置する。「ケンギル同盟」と「キシュの王」の位置付けは、ジェイコブセンと逆になる。

表 1

Jacobsen			Hallo		
初期王朝時代第1期	原始民主政	ケンギル同盟	キシュの王	黄金時代	初期王朝時代第1期
初期王朝時代第2期第3期 a	原始王政	キシュの王	ケンギル同盟	英雄時代	初期王朝時代第2期
初期王朝時代第3期 b	領域王国			王朝時代	初期王朝時代第3期

最後の王朝時代とは、ジェイコブセンと同様に、王朝理念の確立とアッカド王朝に至る統一へと進む時代である。

ジェイコブセンとハッローが初期王朝時代をどのように見たのかを概略示した。ジェイコブセンの「原始民主政」論は、メソポタミア史に ad hoc であるが民主政の萌芽を認めることであり、彼の意図は、オリエントをヨーロッパとは全く別の世界とみなし、市民的自由のない専制体制が強固に維持される世界とする従来の見方に一石を投じることであった。是とすべき意図であるが、前4千年紀末のウルク期にすでに都市国家が形成されているのであるから、それより数百年あとの初期王朝時代第1期を原始共同体的遺制が強く残る社会とみなすジェイコブセンに説得力はない。ジェイコブセンが意図したアジア的専制国家論への反論は、筆者が採用する王権観の発展による3区分の視点から同時代史料を分析することでも可能である。

ジェイコブセンと異なり、ハッローは、初期王朝時代第1期は、原始共同体遺制の残存期ではなく、王権の成立を認め、最初にシュメール全土に緩やかながらもまず統一があり、その分裂・崩壊の時代のあとにアッカド王朝の再統一を置くという図式を採用した。ジェイコブセン説の修正を図ったハッローであるが、注意しなければならないのは、ハッローが採用する時代区分の用語である。黄金時代－英雄時代－王朝時代は、古代のメソポタミアの人々が神話的な過去の見方をもって、神々の時代、英雄の時代、今の人間の時代に区分して理解したことを表現する限りでは意味がある。しかし、前3千年紀メソポタミアを現代の視点から分析するためならば、不正確で不十分である。

両氏に言えることだが、立論は、ギルガメシュの英雄叙事詩や神話といったシュメール文学に大きく依存する。英雄叙事詩や神話は文学作品であり、その性格上、史実に沿う記述になっていないし、時代・時間を考慮しない叙述である。ジェイコブセンとハッローとで「キシュの王」と「ケンギル同盟」の位置付けが逆転するように、文学作品は、彼らのシェーマ、ジェイコブセンは原始民主政、ハッローは分裂－統一－分裂の周期的展開を語るために恣意的に選択される可能性があり、根本史料として利用することに疑問がある。中原与茂九郎氏が提唱したように、歴史研究において同時代史料たる王碑文や行政経済文書に依拠した実証研究が再確認されるべきである（中原1966; 1968）。筆者が取り組む都市国家分立期・領域国家期・統一国家期という3区分の設定は、同時代史料である王碑文に依拠することで、中原氏の提案を実際に試すことである。そのことで、ジェイコブセン・ハッローが陥った隘路を避ける事ができると考える。

さて、ジェイコブセンもハッローも、初期王朝時代第3期を領域王国や王朝時代と規定している。この時期を筆者は都市国家分立期に区分することから、両氏の規定と大きな差はない。しかし、ジェイコブセンとハッローが利用した同時代史料、「キシュの王」に関係して提示された王碑文と、「ケンギル同盟」に関わって挙げる都市印章やファラ文書を再検討し、「ケンギル同盟」というシュメール諸都市の連合が存在し得たか、「キシュの王」が宗主権を意味するのかを検討

することは、前3千年紀メソポタミアの歴史を考えると必要な手続きとなる。節を改めて、「ケンギル同盟」と「キシュの王」を検討したい。

II. 「ケンギル同盟」

ケンギル (ki-en-gi(-r)) という用語は、ウル第三王朝時代以降に現れる王号「シュメールとアッカドの王 lugal ki-en-gi ki-uri」にあるように、或る時期からアッカドに対するシュメールを指示した。ジェイコブセンは、語源的にケンギル＝ニップルであり、原始民主政期にシュメール諸都市の大集会がニップルにおいて開かれ、その全シュメールの同盟が、開催地に因んで「ケンギル同盟」と呼ばれていたと考えた。ジェイコブセンが推定したケンギル＝ニップルは言語学的に疑問があるとされており、さらに、ニップルの集会は、シュメール神話に描写される神々の集会からの類推であり、証拠立てる史料はない。

ジェイコブセンが挙げるジェムデトナスルやウル古拙文書中の都市印章も、諸都市の交換・贈答、もしくは外交関係を示すのみで、「同盟」関係、それも軍事同盟を結成していたかは証明できない。まして、「ケンギル同盟」という名称を証明する史料ではない。

次に、「ケンギル同盟」を証明するために利用された2つのファラ文書 (WF 92; 94) は、キエンギ (正確にはエンギ市 en-gi^{ki}) に集められた6都市国家、ウルク、アダブ、ニップル、ラガシュ、シュルッパク、ウンマの兵士の記録である⁽¹⁾。ファラ文書によれば、ウルクを筆頭とする6都市の兵士が en-gi^{ki} に派遣されたことは事実である。しかし、ファラ文書に記されるキエンギ (en-gi-ki) は、ジェイコブセンが想定するようなキエンギ＝シュメールではなく、エンギ en-gi^{ki} という名の都市であり (RGTC 1, 86)、シュメール全域を指すのでも、ニップルを指すのでもないことは確かである。つまり、ファラ文書は、ウルクなど6都市が兵士を1ヶ所に集めたことを記録するが、会議のための招集でなく、軍事的な兵士の招集であり、それもニップルでなくエンギに集合するのであるから、シュメールの全都市からニップルに招集されたとされる「ケンギル同盟」の要件を満たさない。ファラ文書からは、ジェイコブセンの「ケンギル同盟」観を証拠立てることが出来ない。

加えて、史料操作の根幹に関わる疑問がある。ジェイコブセンとハッローは、ファラ文書を前2500年以前の初期王朝時代第3期 a の文書として利用した。しかし、ファラ文書は第3期 b に置くべき文書である。なぜなら、ファラ文書では、地名を示す限定詞 ki を添える正書法が採用されている。この正書法はラガシュのウルナンシュやウルのアカラムドゥの王碑文では未だ採用されず、限定詞 ki が書かれるようになるのは、ラガシュのエアンナトゥムや、ウルのメスアンネパダの王碑文からである。第3期 b の開始時期より少し遅れて始まった正書法であるので、ファラ文書もその時期以降に置くのが妥当である。したがって、ジェイコブセンやハッローが、初期王朝時代第1期や第2期の王権を理解するために利用したファラ文書は、たとえ後世の遺制とい

う限定付きにしても、前2500年以前、初期王朝時代前半における全シュメールの統合を何ら証明する文書ではない。

III. キシュの宗主権と王号「キシュの王」

先に述べたように、ジェイコブセンもハッローも、「キシュの王」を、シュメールの全都市に対する宗主権の意味にとる。そのように断定できるのだろうか。初期王朝時代第1期や第2期については、史料が無く、キシュの王権を云々することは出来ない。第3期bの同時代史料で知られる王号「キシュの王」は、領域国家期の「国土の王」のような全土支配を意味しない。少し煩瑣な記述になるが、そのことを検証したい。

キシュの王メシリムは、ラガシュとアダブに王碑文を残す。残された3つの碑文には、他の王碑文と異なり、末尾にそれぞれの都市の支配者の名を加えるという特色がある⁽²⁾。碑文は奉納するメシリムを顕彰するために書かれたのであるから、メシリムの名を刻めば目的が達成される。王碑文の形式としては異例な在地の支配者の名を敢えて記した理由は、次のように考えられる。当時、都市支配者は特権として自国の神々に対する排他的な祭儀権を保持しており、他の都市の支配者が奉納することは容認されない行為である。権利がないメシリムにラガシュとアダブの神への奉納を承認したことを示すために、ラガシュとアダブの支配者は碑文の末尾に名を記した、と。つまり、キシュの王メシリムが、ラガシュやアダブに対して権勢を誇ったにしても、在地の支配者の承認なしには、神への奉納を行い得なかった。そこに、キシュの王が持つ宗主権の限界性がある。

さらに、キシュの王メシリムは、他都市の神々に奉納する権限を与えられたにしても、神殿を建てる権限までは認められていない。神殿建立に関わる記事がラガシュ出土のメシリム碑文にある。古拙的な書き方で幾つかの解釈が可能である。筆者は、「建築成ったニンギルス神殿に」と訳し、ラガシュの都市神ニンギルスの神殿が竣工を向かえたとき、それを祝ってメシリムが奉納したと解釈するのであるが、「ニンギルス神殿が建てられたとき $u_4 e_2$ ⁴nin-gir₂-su du₃-a」、「ニンギルス神殿を彼（メシリム）が建てたとき $u_4 e_2$ ⁴nin-gir₂-su in-du₃-a」、もしくは「ニンギルス神殿を建てた人（メシリム） $lu_2 e_2$ ⁴nin-gir₂-su in-du₃-a」とも解釈可能な書き方である。RIME 1が採用する「ニンギルス神殿を建てた人（メシリム）」が、一般的な解釈であろう。しかし、最後に示された動詞が、奉納を意味する a-ru でなく、tum₂で書かれていることに注目したい。動詞 tum₂の場合、「彼（エンアンナトゥム 1 世）の像を造り、ルガルウルカル神のために、神殿に納めた(tum₂)」(RIME 1, 188)、「白い杉で門をつくり、彼（エンメテナ）の生命のために、神殿に納めた(tum₂)」(RIME 1, 225)のように、運び入れる場所が必ず書かれているので、メシリムの碑文においても、奉納品を納めるべき神殿が明記されていると解釈でき、「ニンギルス神のために建てられた神殿に」の訳を付した。重要なのは、どの解釈をとるにしても、

ニンギルス神殿建立に関して、メシリムを行為者として明示しないことである。

神殿建立の特権は王権を考える上に重要な要素である。統一国家期であるウル第三王朝の諸王は、地上の支配権が唯一ウルの王のもとにあることを示すために、都市支配者から神殿建立の権限を奪い、自らの特権として神殿を建立した。ウル第三王朝の王が神殿建立の大権を行使するのに対して、キシュの王メシリムに都市神の神殿を建てる権限はなく、あくまでもラガシュやアダブの在地の支配者の権利であった。メシリムが権勢を誇ったにしても、キシュの宗主権を認めた都市は、統治権を奪われて隷属状態に置かれたわけではなく、都市固有の権利は保持されていた。都市国家的伝統が生きているのである。

次に、キシュの王メシリムの権威がシュメール全土に及んでいたかどうかである。メシリムの碑が出土したラガシュとアダブは、両都市の間に位置するウンマとの対立から利害が一致し、対ウンマのラガシュ・アダブ連合を組んでいた。対するウンマは南部地域のウルとウルクと連合した。メシリムはアダブ・ラガシュ連合に荷担したのであり⁽³⁾、ラガシュ・アダブ連合とウンマ・ウル・ウルク連合、二つの連合の上に立って、両者を調停する役割を担ってはいない（前田2007）。同時代史料からは、メシリムが行使するキシュの王権は、権限においても影響力の広がりにおいても限定的であったことが確認される。

メシリムの治世より数世代あとに、シュメール諸都市の王が「キシュの王」を名乗る時期が来る。この王号は、地上の支配権に与る最高神エンリルでなく、戦闘の女神イナンナから授与されており、直接的には領域支配を明示する王号でなく、覇権を争う諸王の中で他を圧する武力に秀でた王であることを示すに過ぎない（Maeda 1981, 前田2003）。このように、初期王朝時代第三期bに確認される「キシュの王」は、伝統的権威として認められた王号であったにしても、全土の支配や諸都市の上に君臨する王の称号ではなかった。つまり、都市国家分立期には、全シュメールを支配する王という王権観も称号も存在しないのであり、領域国家期の「国土の王」の登場を持って嚆矢とする。

以上述べてきたように、ジェイコブセンやハッローが描く初期王朝時代像は、同時代史料から証明されない。図形に引く補助線に喩えれば、ジェイコブセンとハッローの区分は、正解に導く補助線になり得ないのであり、問題の核心に近づくことは出来ない。

IV. 地域国家の成立

前節で触れたシュメール諸都市の王が名乗る「キシュの王」は、シュメール統合の主導権をめぐる争いが激化した都市国家分立期の最終段階に使用された。筆者は、「キシュの王」をジェイコブセンやハッローのように過去の時代に投影することなく、この時期を特徴付ける王号として重視してきた。これに加えて、この時期に、地域国家が成立したことを指摘したい。地域国家とは、近隣の都市を支配に組み入れ地域統合を果たした有力な都市国家を指す。地域国家の成立は、

それ以前の時代と区別する指標となり、都市国家分立期の下位区分に役立つと考える。

地域国家の候補として、ファラ文書で確認されるエンギに集合した6国、ウルク、アダブ、ニップル、ラガシュ、シュルッパク、ウンマを挙げることが出来る。

6国の中で、ウルクとウンマが近隣の都市を支配下に置いたことは、ルガルザゲシの碑文から明らかになる⁽⁴⁾。ルガルザゲシは、シュメール統合の偉業を果たすために、ウンマからウルクに王都を移した王である。王都となったウルクを6都市の筆頭に置く。ついで、ウル、ラルサを挙げた後に、母国であるウンマを挙げる。そのあとにザバラムとキアンというウンマに隣接した都市が続く。つまり、ルガルザゲシが支配の直接基盤としたのは、王都となったウルクとその勢力圏にあるウルとラルサ、それに母国であるウンマとその勢力圏にあるザバラムとキアンである(Maeda 2005)。

ウルクとウンマ両勢力圏に属するウル、ラルサ、ザバラム、キアンについて順次述べてみたい。ウルクがウルを支配するのは、ウルクの王ルガルキギンネドゥドゥとルガルキサリシが「ウルクの王、ウル王」を名乗ったときからである(RIME 1, 414-415, 422-423)。それ以前、ユーフラテス川中流域のマリまで勢力を延ばしたウルであるが、その隆盛はアアンネパダあたりまでであり、その後ラガシュに敗れ、ついでウルクに服属した。ウルが自立し、昔日の勢力を再び取り戻し、有力都市国家の一つとして活躍するのは、ウルクの王ルガルザゲシがサルゴンに敗れたことで、ウルクの桎梏から解放されたときである。サルゴンのあとアッカド王朝第2代の王リムシュの治世初頭に、ウルの王カクが中心となって叛乱を起こしたことは、ウルが復活を果たしたことの証明になる。

ウルクの勢力圏に挙がるもう一つのラルサは、ラガシュとウルクが領有を競った都市である。ラガシュの王エンメテナは「ウルクの市民、ラルサの市民、バドティビラの市民に自由を与えた」と宣言した(RIME 1, 204)。ラガシュがラルサを勢力下に収めたのであるが、ラガシュが後退したことで、ウルクが代わってラルサを支配したと考えられる。

エンメテナ碑文に挙がるバドティビラもラガシュの後退によって、ウルクの勢力下に入った。バドティビラについては、時代は下るが、アッカド王朝衰退期に、真っ先に独立を果たしたウルクの王ウルニギンは、王子のウルギギルをバドティビラに将軍として派遣した。バドティビラで、ウルギギルは、都市神イナンナの神殿を建立している⁽⁵⁾。都市神のために神殿を建立することから、ウルギギルはバドティビラの実質的な支配者であったことは確実であり、バドティビラがウルクの支配下にあったことが確認される。

ルガルザゲシがもう一つの支柱としたウンマの地域統合はウルクより進んでいた。ザバラムは、早い時期にウンマの勢力圏に入っていた。ラガシュとの戦闘でウンマの支配者ウルルンマが敗死したとき、ウンマの王族イルが代わって王になった。イルは、即位するまで、ザバラムの最高神官(サンガ)職にあったことから(RIME 1, 197)、ザバラムはウンマの支配下にあったことに

なる。ウル第三王朝時代には、ザバラムとキアンは、一市区としてウンマに組み込まれていた。しかし、それ以前のアッカド王朝時代、リムシュがシュメールの反乱を鎮圧した時に、ウンマの支配者（エンシ）の他に、ザバラムの支配者（エンシ）やキアンの支配者（エンシ）を捕虜にしている（RIME 2, 43-44）、アッカド王朝時代以前では、ザバラムやキアンはウンマの支配下にあったとしても独自の支配者を戴いて、なお完全には服属したのではない自立的な都市国家であったことは確かである。

アダブについては、隣接するケシュ、カルカルと併記するファラ文書がある。

「1 キニドゥ（人名）、アダブのマシュキム、1 クリカラム（人名）、ケシュのマシュキム、1 ミムド（人名）、カルカル⁽⁶⁾のマシュキム」（WF 103）

文書にあるマシュキムとは何らかの監察を行う役職であり、マシュキムとして記された者は、アダブ、ケシュ、カルカルから派遣されてシュルッパクで任務に就くのか、もしくは、シュルッパクの役人で、アダブなど別の都市に関わる事務を監察する者の意味になるとおもえるが、詳細は不明である。注目すべきは、ケシュとカルカルは、都市国家としてアダブと併記されているが、兵士を派遣する6国から除外されている。ケシュとカルカルは文書の筆頭に記されたアダブに従属し、アダブの上級指揮権を認めてその指揮下にあり、ケシュとカルカルがエンギ市に兵士を派遣したとしても、アダブの兵士の中で数えられることになったと考えられる。アダブ、ケシュ、カルカルを併記するこのファラ文書は、単純な内容ながら、アダブが近隣の都市国家を支配し、地域国家に上昇していたことを示す貴重な文書である。

地域国家とそれに服属する都市国家をまとめると次のようになる。

地域国家	服属する下位の都市国家
ウルク：	ウル、ラルサ、バドティビラ
ウンマ：	ザバラム、キアン
アダブ：	ケシュ、カルカル

エンギに兵士を派遣した6国のうち、ウルク、ウンマ、アダブ以外のニップルやシュルッパクがどのような都市を服属させたかは不明である⁽⁷⁾。残るラガシュは、近隣地域に勢力を延ばすまでもなく、時期は特定できないが早い段階に、ギルスを中心に、本来独立した都市国家であったラガシュとニナを併せた3つの中心市区と、キヌニル、キエシャなどの小市区を包含した巨大な複合都市国家を形成していた（前田1998）。地域統合を完全な形で果たしたのがラガシュであると言える。

以上述べたごとく、ファラ文書に記録された6国連合とは、地域統合を果たした有力な都市国家（＝地域国家）の連合である。地域国家に服属するその他の都市国家は長い伝統を誇ったにしても、アダブ支配下のケシュやウルク支配下のラルサのように統治権を制限される地位に甘んじた。つまり、都市国家分立期における抗争過程で、都市国家は、強大化する地域国家と、それに

圧倒され隷属する下位の都市国家とに二分されることになった。この二極分解を、都市国家分立期の最終局面における特徴として捉えることが出来る。

先に課題とした900年続いた都市国家分立期に下位区分が設けられないかという問題に、シュメール都市国家の二極分解が基準になると考える。それを確かめるために、ジェムデトナスル期と初期王朝時代の都市印章を検証する。都市印章は、ジェイコブセンがシュメール諸都市の同盟を立証するために利用したが、同盟関係を推測することより、どのような都市が印章を捺すのかに着目する。

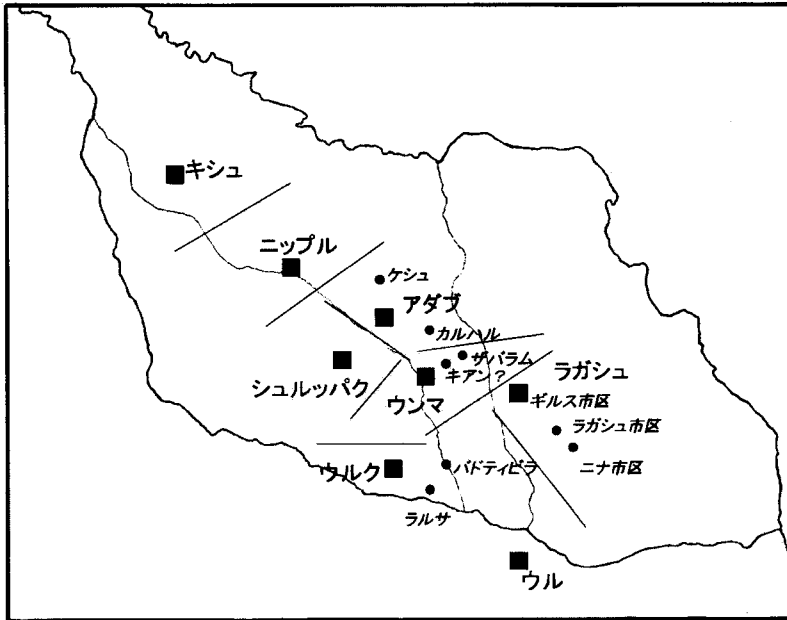
都市印章のすべてについて都市名が同定されているわけではないが (Matthews 1993; Steinkeller 2002a, 2002b)、少なくとも、ジェムデトナスル期では、ウルクやウルの都市印章に並んで、ケシュ、ザバラム、ラルサの印章が捺されていることは確かである。同様に、初期王朝時代第2期とされるウルの古拙文書中に捺された都市印章でも、ウル、ニップル、ウルク、アダブに並んで、ラルサ、ケシュなどの都市印章がある。都市印章を残すウルク、ウル、ニップル、アダブは、都市国家分立期の末には地域国家に上昇しているが、ケシュ、ザバラム、ラルサは、各々、地域国家であるアダブ、ウンマ、ウルクに服属する下位の都市国家となっていたことは、先に見たとおりである。つまり、ジェムデトナスル期や初期王朝時代の早い時期では、いまだ、地域国家とそれに服属する下位の都市国家の格差が認められず、同等に並んだ位置にある。つまり、都市印章は、二極分解以前のシュメール都市国家の状態を反映するのである。

都市国家の二極分解を基準にすれば、シュメール都市国家のあり方がジェムデトナスル期や初期王朝時代第2期と、初期王朝時代第3期bで異なることが明らかになる。次に問われるのが、都市国家の二極分解がいつ始まったかである。初期王朝時代第2期なのか、第3期aなのか。それを直接示す史料を提示することは出来ない。しかし、都市印章の消失と王碑文の出現という二つの事象を関連させれば、一つの推測は成り立つ。

都市印章はジェムデトナスル期や初期王朝時代の早い段階で使用され、その後に例を見ない。都市印章が使用されなくなると、代わって王碑文を作ることが活発になる。一般的に言って、王碑文や行政経済文書が多く出土するようになるのは、前2500年以降、メシリム王以降の初期王朝時代第3期bになってからであり、初期王朝時代第3期aまでは、文字史料がほとんど無く都市国家間の動向を詳細には知り得ない。出土資料のこうした傾向は、偶然でなく、次のような政治状況が背景にあると考えられる。都市国家間の争いが激化することに対応して、都市国家は「富国強兵」を必要とし、王の指導力・統率力が求められ、王権が強化された。王は自らの権威を誇示するために、王のイニシアティブで行っていることを王碑文で示し始めた。

初期王朝時代では、すべての都市が王碑文を残すわけではなく、王碑文を残すシュメール都市は、アダブ、ウル、ウルク、ウンマ、キシユ、ニップル、ラガシュの7都市である。6国連合を形成するシュルツパクに王碑文が出土しない理由は不明であるが、アッカド王朝時代とされる王碑文

地図1 シュメールの地域国家



が発見されていることから（RIME 2, 260）、初期王朝時代の王碑文が出土する可能性は否定できない。ウルは6国連合形成時期にはウルクの支配下にあったが、有力都市であったことは先に見たとおりである。キシュは6国連合の対戦国であり、当然に有力な地域国家であったと考えて間違いはない。つまり、6国連合を構成する都市にウルとキシュを加えた8都市を地域国家に分類できる（地図1）。

王碑文の成立によって、都市の名で行うことを象徴する都市印章の存在意義が消失した。さらに、王の指導の下に王の組織や神殿などの管理運営が文書主義によって整備され、多くの行政経済文書が残される時代になった。つまり、前2500年頃には、都市国家間の争いに勝ち抜くために強国化の方策が模索されており、それこそが都市国家が地域国家へ上昇する前提になるとと思われる。このことから、並立する都市国家群から、地域国家成立による都市国家の二極分解の開始を、前2500年頃に置くのが妥当だと考える。

おわりに

シュメール都市国家には、地域統合を果たした有力な都市国家＝地域国家という形態が存在すること、さらに、地域国家の形成と地域国家に服属する都市国家の二極分解から判断して、都市国家分立期の下位区分として、前2500年頃に区分線が引けることを示した。都市国家分立期の次に来る領域国家期・統一国家期に、地域国家が王権の展開とどのように関わるのか。その全体を述べることは出来ないにしても、言及する必要がある。

ファラ文書で確認されるウルク、ラガシュ、ウンマ、アダブ、シュルッパク、ニップルにウルとキシュを加えた8都市国家は、ウル第三王朝時代でも有力な中核都市であった。他方、地域国家に服属した下位のラルサやケシュなどは、ウル第三王朝時代に、中核都市として記録されることがない。つまり、初期王朝時代第3期bに形成された少数の地域国家から成るシュメール地域という基本形態がウル第三王朝時代まで維持されたのである。

少数の地域国家群は6国連合が記録された時点で形を整えていたのであるから、6国連合を記録するファラ文書がどの王のときの文書であるかを定めることが必要になる。先に、正書法を基準にすれば、作成年代の上限はラガシュのエアンナトゥム、ウルのメスアンネパダ以降の時期になると述べた。ファラ文書の内容から、作成年代をさらに狭められる。

兵士を派遣した6都市に、ウルは含まれない。シュメール諸都市の兵士数を記した他の2枚のファラ文書でも、ウルは記録されない⁽⁸⁾。既に指摘したように、ウルは、ウルクの王ルガルキギネドゥドゥに支配されて以降ルガルザゲシの支配期まで、ウルクに服していた。そのことで、ウルは6国連合に加われなかったと考えられる。したがって、ファラ文書の作成年代をウルクの王ルガルキギネドゥドゥ以降と限定できる。

兵士を派遣する6都市にラガシュとウンマが加わることも、時期を限定することに役立つ。ラガシュとウンマが共同して兵士を派遣できるのは、エンメテナ治世以降である。なぜなら、ラガシュはウルナンシュからエンメテナまで長年にわたりウンマとの間でグエディンナを巡って争っており、国境争いが続く期間では両都市の共同行動は不可能である。エンメテナ治世に協約が成立したことで(前田2003a)、ラガシュとウンマの共同行動は可能になる。ラガシュとウンマの国境争いは、ラガシュの王ウルカギナの時に再び勃発しており、ウルカギナと戦ったルガルザゲシの治世では、ラガシュとウンマ両都市の共同行動は不可能であった。

このように、6都市から派遣された兵士を記録するファラ文書の作成年代は、上限をウルクではルガルキギネドゥドゥ、ラガシュではエンメテナ、下限をルガルザゲシ登位までの時期に限定が可能である。このように限定できるとすれば、ファラ文書の作成が、エンシャクシュアンナ治世である可能性が高くなる。ファラ文書にエンシャクシュアンナの名を探せないが、エンシャクシュアンナが名乗る王号「キエンギのエン(en ki-en-gi)」(RIME 1, 429-430; 431-432)のキエンギが、6国が集合したエンギ市と関わると思えるからである。エンシャクシュアンナが自称する「キエンギのエン」の意味を考えたい。

領域国家期や統一国家期の王は、アッカド王朝初期3代を除いて(前田2007)、支配の拠点と、支配すべき領域を示す王号を2つ並べて使用した。例えば、ルガルザゲシが名乗る「ウルクの王、国土の王」は、王朝の中心ウルクと、支配すべき範囲である国土=文明地域を表示する。ウル第三王朝の「ウルの王、四方世界の王」も同様であり、拠点たるウルと、支配すべき全土(四方世界)を示す。領域国家期最初の王であるエンシャクシュアンナが名乗る「キエンギのエン、国土

の王」では、支配すべき領域を示す「国土の王」は問題ないにしても、支配の拠点を示して「ウルクの王」とあるべきところが、「キエンギのエン」になっていることが異例なのである⁽⁹⁾。

最新の王碑文集では、「キエンギのエン」を「シュメールの君主 lord of the land of Sumer」と訳して、キエンギをアッカドの対となる「シュメール」の意味に採る (RIME 1, 430, 432)。しかし、これでは、支配の拠点を示すはずの「キエンギのエン」が、支配領域を示す王号になり、「国土の王」と重複してしまう。したがって、「キエンギのエン」を単純に「シュメールの君主」と解釈できない。さらに、キエンギをエンギ市の別形として、エンギの君主も可能であるが、ウルクの王に代えて、小都市エンギの君主を名乗る必然性はなく、この解釈は成立しない。根拠を別に求める必要がある。

シュメール語に、ki lagaš^{ki} や ki unu^{ki} のように、都市名の前に ki を加える表現形式がある。lagaš^{ki} は、ラガシュ都市国家の意味と、その一市区ラガシュ市区の両方の意味を持つが、ki lagaš^{ki} とあれば、ラガシュ都市国家内のすべての市区、ラガシュ全域の意味になる。ki unu^{ki} も同様に、クラブ市区などを含むウルク全域を意味する (Yoshikawa 1985)。エンシャクシュアンナが王号に使用した ki-en-gi も同等に、「エンギを中心とした全域 ki en-gi^{ki}」の意味に取ることができる⁽¹⁰⁾。この場合、地域国家ラガシュやウルクと違って、小都市エンギの全域を強調する必然性はない。エンギが重要なのは、ファラ文書に記録された6国の兵士が集う地としてである。つまり、ki en-gi^{ki} = 「エンギ市を中心とした全域」とは、「エンギに集う地域国家が割拠する地域の総体」を指すと考えられる。キエンギをこのように解釈するならば、ファラ文書とエンシャクシュアンナとが結びつき、ファラ文書の作成はエンシャクシュアンナ治世になる。つまり、ファラ文書は都市国家分立期でなく、領域国家期の文書ということになる⁽¹¹⁾。

地域国家とエンシャクシュアンナの領域支配との関係を見ると、エンシャクシュアンナが、支配の中心ウルクでなく、キエンギ = 「エンギに集う地域国家が割拠する地域の総体」の君主を名乗ることは、支配の基盤をエンギに集う地域国家に置くことの宣言になる。エンシャクシュアンナは対キシュ戦争のために動員を命じたが、それに従った地域国家は、都市国家間の争いで獲得した地域国家の地位を保証された。中国において秦が対抗する諸国を各個撃破して中国統一を果たしたことと異なり、「国土の王」となったエンシャクシュアンナは地域国家を滅ぼさなかった。むしろ、地域国家が共存する分権的な政治形態を固定化することに力を貸したのである。

エンシャクシュアンナがこのような意味でのキエンギの君主を名乗ることから、都市国家分立期を終わらせた領域国家の成立といっても、中央集権を目指すには不可欠な都市国家との関係が清算できず、当初から分権的傾向を内在して出発したということである。

領域国家の王エンシャクシュアンナが支配下にある地域国家の自立性を尊重したが、その地域国家もまた、都市を破壊して中央統制を強める方向でなく、服属した都市国家の自立を認めて地域統合を成り立たせていた。このような都市国家の自立を認める動きに、シュメール世界におけ

る都市国家的伝統の強靱さが窺える。

最後に、キエンギという地域呼称についてであるが、キエンギはその成立事情から見て、当初、中心文明地域のなかであって、王が依って立つ直接的な基盤としての中核地域の意味で使用された。キエンギは、エンギに集うことが出来た地域国家に焦点を当てた用語であり、アッカドに対するシュメールを意味してはいない。その後、アッカド王朝の成立によって、シュメールとアッカドという民族的な見方が生まれ、とりわけ、ナラムシンのとき、ニップルを境に北にアッカド、南にシュメールという二分法的地域概念が導入されたことで、中核地域を構成する地域国家がすべてシュメール人の都市であったことと、中核地域とアッカド地方に対するシュメール地方がほぼ同一の広がりであるという類似性から、キエンギをシュメールを表記するために転用したのである。つまり、「キエンギ」が民族概念としてシュメール人やシュメール地方を表現するようになるのはアッカド王朝時代、それもナラムシン治世以降であり、それ以前では決してない。キエンギを民族的なシュメールの意味に採って立論するジェイコブセンやハッローの議論は根拠を失うことになる。

注

- (1) WF 92「182人のウルクの兵士、192人のアダブ（の兵士）、94人のニップル（の兵士）、60人のラガシュ（の兵士）、56人のシュルパック（の兵士）、86人のウンマ（の兵士）、編成済みのエンギ（en-gi-ki）に行く（兵士）。合計670人の兵士、（義務に）服する者。」
WF 94「140（102?）人のウルクの兵士、（義務に）服する者、215人のアダブ（の兵士）、74人のニップル（の兵士）、110（65?）人のラガシュ（の兵士）、66人のシュルパック（の兵士）、128人のウンマ（の兵士）、総計650人の兵士、エンギ（en-gi-ki）において（義務に）服する者。」
- (2) 「キシュの王メシリムが、建築成ったニンギルス神殿に、ニンギルス神のために（この石製の棍棒頭を）奉納した。（そのとき）ルガルシャエンゲルがラガシュの支配者。」（RIME 1, 70）
「キシュの王メシリムがエサル神殿に（この）ブル（Ⅲ）を献納した。（そのとき）ニンキササルシがアダブの支配者。」（RIME 1, 71）
「メシリム、キシュの王、ニンフルサグ神に愛される子（が）奉納した？ [破損] [は] [アダブの] 支配者。[破損]」（RIME 1, 71）
- (3) 「ルガルナムニルスム、キシュの王」という銘を刻む剣が、ラガシュで発見されている（RIME 1, 73）。キシュには限定詞 ki が付されておらず、この剣はウルナンシュ以前に置くべき碑文である。メシリムとルガルナムニルスムとの前後関係は確定できないにしても、武力的援助の象徴として、キシュの王からラガシュに贈られたと考えることができ、キシュとラガシュの関係がメシリム一代に限らないで、長く続いたことを裏付ける証拠となると思われる。
- (4) 「ウルクは喜びの日々を過ごす、ウルは牡牛のごとく頭を天に高める、ウトゥ神が愛する都市ラルサは楽しきときを過ごす
シャラ神が愛する都市ウンマは大いなる腕を振り上げる、ザバラムは母羊と戻った子羊のごとく互いに（愛情を持って）呼び合う、キアンは首を天に指し出す。」（RIME 1, 436-7）
- (5) 「ウルギギル、ドゥムジ神の将軍であり、強き者、ウルクの王ウルニギンの子が、（彼の父ウルニギン）と、彼の母アマサルメフブ（の長寿を願って）、彼の女主ニンシェシュエガル神のために、彼女（ニンシェシュエ

ガル神)の愛する神殿を、バドティピラに建てた。」(RIME 2, 274-5)

- (6) ダイメルの翻字では¹IMとあって、IM^{ki}ではないが、IM(karkar)^{ki}に採っておく。
- (7) エンギに招集された6国の兵士をシュルッパクが記録するのであるから、エンギに対して地域国家シュルッパクは上級支配権を有していたと考えるのが妥当である。エンギをウルに近く Engi (IM^{ki})に同定する説もあるが(RGTC 1, 78)、採れない。
- (8) 「[ウルク]、704 (人) アダブ、528 (人) ニップル、440 (人) ラガシュ、[] ウンマ」
「1502兵士、25隊長、ウルク、787、10 [+3?] 隊長、ニップル、660、11隊長、アダブ、480、8隊長、ラガシュ、480、8隊長、ウンマ、シ10建築師、10鍛冶工、6革鞣し工、シュルッパク、[] 建築師、[] 箆製造工」(Viscato 1995, 64-6)
- (9) エンシャクシュアンナを「ウルクの王」と書く王碑文は存在しない。しかし、ニップル出土の行政経済文書に記された年名「ウルクの人がキシュ市を占領した年」が「エンシャクシュアンナがキシュ市を占領した年」の別形であると認められることから(Westenholz 1975, 115)、エンシャクシュアンナがウルクの王であることは疑いない。
- (10) 初期王朝時代のラガシュ文書では、エンギのニンアズ神への奉納を記録する際、ki-en-gi^{ki}, ki-en-gi^{ki}と表記する(中原1964, 100ff.; RGTC 1, 87)。なぜ、kiを前に付すのか、検討を要する問題である。
- (11) アブツァラビク文書の年代について述べておきたい。アブツァラビク文書には、アダブ、ニップル、ラガシュ、シュルッパク、ウンマ、それに冒頭部分に欠けて確実ではないがウルクを記した都市リストがある。このリストが、エンシャクシュアンナ治世の6国連合と同じく、ウルを含まないことから、アブツァラビク文書の作成年代の上限を、エンシャクシュアンナ治世に置くことが可能である。つまり、アブツァラビク文書は、ファラ文書と同じく、領域国家期以降に書かれた文書であり、決して、初期王朝時代第3期aのような古い時期の文書ではない。

略号・引用文献

- RGTC 1: D.O. Edzard, et al, *Die Orts- und Gewässernamen der prä-sargonischen und sargonischen Zeit*, (Répertoire Géographique des Textes Cunéiformes, 1), Wiesbaden, 1977.
- RIME: The Royal Inscriptions of Mesopotamia. Early Periods
- RIME 1: D.R. Frayne, *Presargonic Period (2700-2350 BC)*, Tronto, 2008
- RIME 2: D.R. Frayne, *Sargonic and Gutian Periods (2334-2113 BC)*, Toronto, 1993
- WF: A. Deimel, *Wirtschaftstexte aus Fara* (Die Inschriften von Fara, 3), Leipzig, 1924.
- Hallo 1971: W.W. Hallo & W.K. Simpson, *The Ancient Near East. A History*, New York.
- Jacobsen T. 1957: "Early Political Development in Mesopotamia," *ZA* 52 (前川和也訳「メソポタミアにおける初期の政治発展」古代学協会編『西洋古代史論集I』東大出版会 1973年 61-136頁)
- 前田徹1981: 「シュメール初期王朝時代」『史観』104, 7-17.
- Maeda T. 1981: "'King of Kish' in Pre-Sargonic Sumer," *Orient* 17, 1-17
- 前田徹1998a: 「複合都市国家ラガシュ」『史朋』30, 14-25.
- 前田徹2003a: 「エンメナナの回顧碑文」『西洋史論叢』25, 3-11
- 前田徹2003d: 『メソポタミアの王・神・世界観—シュメール人の王権観』山川出版社
- Maeda T. 2005: "Royal Inscriptions of Lugalzagesi and Sargon," *Orient* 40, 3-30
- 前田徹2007: 「キシュとウルクの対立」『史朋』39, 1-13
- Matthews R.J. 1993: *Cities, Seals and Writing: Archaic seal impressions from Jemdet Nasr and Ur*. Berlin
- 中原与茂九郎1964: 「ケンギル同盟について」『史林』47/1, 93-111
- 中原与茂九郎1966: 「シュール古拙文書について」『西洋史学』69, 1-11

中原与茂九郎1968:「シュメール王権の成立と発展」『西洋史学』77, 1-20

Nissen 1993: Nissen H.-J. et al, *Archaic Bookkeeping: Early Writing and Techniques of Economic Administration in the Ancient Near East*, University of Chicago Press (*Frühe Schrift und Techniken der Wirtschaftsverwaltung im alten vorderen Orient*, Bad Salzdetfurth 1991)

Steinkeller P. 2002a: "Archaic City Seals and the Question of Early Babylonian Unity," T. Abusch (ed.), *Riches Hidden in Secret Places: Ancient Near Eastern Studies in Memory of Thorkild Jacobsen*, Winona Lake, 249-57

Steinkeller, P. 2002b, "More on the Archaic City Seals," *NABU* 2002, no.30

Visicato G. 1995: *The Bureaucracy of Šuruppak. Administrative Centres, Central Offices, Intermediate Structures and Hierarchies in the Economic Documentation of Fara*, Ugarit-Verlag, Münster

Westenholz A. 1975: *Old Sumerian and Old Akkadian Texts in Philadelphia, Chiefly from Nippur*, Part 1, Malibu

Yoshikawa M. 1985: "Lagaš and Ki-Lagaš, Unug and Ki-Unug," *Acta Sumerologica* 7, 157-164